



北アルプス前衛の大滝山の樹林帯を登っているときであった。

辺りは湿気が高く不穏な空気が漂っているような気がしていたが、突然耳をつんざく大音響で地面がズンツと揺れ、直ぐ脇を太い火柱が轟音を発して真横に走った！

仰天して、身に着けていた金属類をかなぐり捨て、右往左往するばかりの恐怖のどん底から、初の北アルプスの旅が始まった。

我に返って、身体が黒焦げどころか木っ端微塵になってしまいうに違いない、恐ろしさで身震いを禁じ得なかった。

最近の雷対策では、先ず高い樹木の下を避けて低地にしゃがみ込み、金属類を外すべし、と云われている。しかし、この時は樹木を避けようのない樹林帯の中、しかも事前に何ら雷鳴も無く、いきなりのことであった。背丈をやや超した程度の高さを、しかも真横に走った太い火柱には、どんな体勢にしてもまるで意味を成さない。思い出してみても、ぞっとする落雷の洗礼であった。

やはり、事前の気象情報や観天望気の知識は不可欠なのだろう。恐怖の、その後はどのように行動したのか、まるで覚えがないまま、とにかく生きて、ポンチョも役立たずのずぶ濡れで、その日の目的地である蝶ヶ岳へ登って来た。

蝶ヶ岳のまあるい山頂は、すっかり晴れ上がっていた。今日はここで最初の夜営をする。

僕にとって、全てがはじめての体験の始まりとなった。

この山旅は、柳川に北アルプスを見せてやろうと、大学の同級生二人が誘ってくれたものだ。

北アルプス前衛の蝶ヶ岳↘常念岳↘大天井岳↘燕岳を踏破しながら槍・穂高を展望する比較的楽な山旅という。そして最後に槍ヶ岳に登る楽しみもある。

テントは、進駐軍放出の濃緑色を山のベテランの同級生がキスリング・ザックの上に積んできていた。そのテントをまだ新しい山荘

(現・蝶が岳ヒュッテ) 近くに張った。

食事は、一体どんな料理をしていたのか？ 飯盒炊さんの写真はあ
るものの、僕は手出しをしなかったせいかな、まるで思い出せない。

北ア前衛と云っても二六〇〇坪は超える山頂近くは、日没以降は
夏山と云っても想像以上に寒く身体の震えが止まらない。シユラフ
のような高級なものは用意して来なかったため、テント内では毛布
で体を包んだ上、厚手の着衣の中に新聞紙を何枚も重ねて、眠るま
では蠟燭で暖をとった。この蠟燭が結構寒さしのぎになった。逆に、
消せば瞬く間に極寒となるのである。

結局眠れたかどうかは覚えが無い。

そして夜明け、テントの入り口を開け放して拝んだご来光は何よ
りの暖かさを与えてくれた。陽が差し込むと同時に、身体がポツと
暖かくなって、太陽の有難みをしみじみと感じた一瞬だ。

そして振り返った。

そこに、モルゲンロートの一大スペクタクルが展開していた！

右手から槍ヶ岳、キレット、そして北穂↘溜沢↘奥穂↘前穂↘西
穂の穂高連峰がご来光のくれないに染まって浮き上がっている。そ
の連峰の裾には僕らが立つこちらの稜線の影を暗青色に落として、
そこに僕らの姿も写し込んでいるのではないかと思われた。

僕らは、その庄巻にただ茫然と立ち尽くすばかりであった。

こうして、パノラマ展望を満喫する稜線の第一歩は始まったばか
りだが、この深遠な広がりにつきかり心を奪われた。

.....

この山旅は六十年も昔のことである。往時をあれこれ追憶し絵に
取り組むのはひと仕事だが、再び山旅をしている気分浸れる。

これは、いわば「ケルン(石積み)」を積んでいるようなもの。僕
の人生の一里塚を築いていることになるのかも知れない。